杉原木価格、年間通して変わらず

製材工場に再編、二極化の流れ

この一年　九州

国産材では、杉原木の価格が年間を通じて居所高の横ばいで推移したのが大きな特徴となった。さまざまに指摘される構造的な要因で原木出材量が抑制されるなか、住宅需要は全国的に低調だったが欧州材をはじめとした外材製品の入荷不安定性による代替需要、また底堅い原木輸出や発電燃料・製紙チップ用需要があり、需給が見合った。

一方、原木高・製品安が続くことになり、以前から金融依存体質が強かった有力大型製材工場では破綻が見られた。東部産業（福岡県うきは市）、西村（鹿児島県霧島市）が自己破産を申請。北條（宮崎県都城市）も事業を停止した。

原木輸出は、米トランプ関税の影響を受けた中国向けを中心に、春から夏場にかけて需要が落ち込み、一時は九州内のC材価格が弱含むなど先行きが懸念された。だが、米中関税問題が当面保留となり、秋に入ると急激な円安が進行したことなどから引き合いが回復することになった。発電燃料用素材は未利用材の不足感が続いており、輸出用などとの競合で価格も居所高のまま。一時は原木輸出が停滞し、低質材需要が緩和されるという見方もあったが、当面は調達競合が続きそうで、枝葉などを混合したハイブリッドチップへの取り組みなどが関心を集めている。

国産材製材では、佐伯広域森林組合（大分県佐伯市）が杉2×4材生産の新工場を着工。九州には、同材供給の先駆企業となるさつまファインウッド（鹿児島県霧島市）があり、国産材の新たなシェア拡大に向けた動きが進められる。ランバーやまと（熊本県上益城郡）は、人吉工場（同人吉市）が本格的に稼働。本社との2製材工場体制で原木消費能力は年間10万立方㍍規模が視野に入り、桧では佐藤製材所（大分県日田市）とともに、全国最大手になってくる。松本木材（熊本県荒尾市）は、リンク製の製材ライン追加導入を明らかにした。これが整備されると、杉で原木消費能力は従来比倍増の年間50万立方㍍規模になる。

林業分野での外国人技能実習生や特定技能外国人の受け入れが可能になり、九州には年明けから来日が始まった。まずは下草刈りや植林などの仕事を中心に、チェーンソーの取扱研修などが進められている。受け入れ団体は「当初から時間をかけて普及していくと考えており、想定したペース」と話している。

地域内の住宅需要は、建築基準法改正前の2～3月の駆け込みが、また確認申請の遅れにより現場が集中した10～11月に動きが出たが、全体に低調なまま推移した。ただ、そのなかで北九州市の民間と地方自治体が連携した国産材利用2×4住宅、LibWork（同山鹿市）が国内で初めて居住空間100平方㍍の3Dプリンター住宅を完成させるなど、新たな取り組みが見られた。越智産業（福岡市）は5月末に熊本センターを竣工。半導体事業の集積などによる地域発展を見込んで営業・物流体制を拡充した。ワイテック（同）は福岡県みやま市でのプレカット工場新設を発表した。

主な出来事

1月◇九州の原木市場、杉・桧とも丸太高続く◇新栄合板工業、杉・桧LVLパネル本格販売

2月◇ユニックス、2年後に2×4パネルで月1万坪体制へ◇都城地域の製材メーカー、KD材3,000円（立方㍍）値上げへ◇持永木材、施工体制強化し電気・基礎工事も開始◇東部産業、2月25日に破産申請準備

3月◇平川木材工業、ノーブラシの工程見直し品質向上◇ヤマエグループHD、みやま市と企業立地協定締結。ワイテックがプレカット工場新設◇西村、2月27日に破産申請準備

4月◇佐伯広域森林組合、杉2×4材生産へ工場着工◇外山木材、4月1日付で社長に外山勝浩氏◇都農ペレット工業が破産へ

5月◇大英産業・ウイング・北九州市など5者、2×4工法の「ALL国産材住宅」を建設◇南日本ハウス、大規模木造に参入◇KNDコーポレーション、防府と北九州に物流デポ開設◇越智産業、熊本センター竣工。半導体産業集積などの発展見込み

6月◇ワイテック、5月22日付で社長に野口信也氏

7月◇福栄、4号特例縮小対策に「おうちプラン」◇Lib Work国内で初めて居住空間約100平方㍍の3Dプリンター住宅◇松本木材、荒尾工場にリンクライン追加

8月◇6月の中国向け原木輸出量、志布志港からの原木輸出に変調◇池見林産工業、「ワイドフローリング」を強化◇本田謙工機、目立て業者として国内で初めて湿式帯鋸目立機Dr.Sを導入

9月◇ランバーやまと、人吉工場が本稼働

10月◇くまもと製材、原木選木機を設置◇ランバー宮崎協同組合、非住宅受注拡大へ加工能力拡充◇唐津バイオマス発電所、営業運転を開始◇オープンハウスグループ、福岡で買取再販事業◇ヒグマ乾燥機、九州営業所を設立

11月◇なかやしき、なかやしきHDを設立

12月◇幸の国木材工業が、工場生産の多能工化進める

農林水産業みらい基金

今年度の助成先7件を決定

林業分野にフルタニランバー

農林水産業みらい基金は19日、2025年度の助成対象事業を決定した。今年の応募は過去最多の209件と初めて200件を超え、厳正な審査の結果、合計7件が選ばれた。林業分野も24年度より1件多い26件の応募があり、そのなかからフルタニランバー（石川県金沢市）といなだに竹Links（長野県飯田市）の2件を助成対象に決定した。

選ばれた7件の助成総額は4億2663万円（申請額ベース）、助成対象事業1件当たりの最大助成額は1億2936万円、最小助成額は693万円。26年1月～最長28年12月まで各事業に資金助成をするとともに、各取り組みを広く紹介していく。

フルタニランバーは、今回の助成を受けて、24年1月の能登半島地震で被災した林業・製材業の復興を目的とした石川県の県木「アテ（能登ヒバ）」の専用倉庫を整備する。

同社は震災後、能登ヒバ林業の復興に向けた取り組みを開始。目的を同じくする企業との協業体制は整ったものの、加工・流通施設が地震で損壊したため製品の供給準備が遅れ、需要とのミスマッチや在庫管理の非効率が生じるなど、物流インフラと情報共有の不足が課題となっている。

専用倉庫の整備はこの課題解決を目指すもので、地域内に商流の拠点をつくり、家具、内装、日用品、楽器などさまざまな分野への用途展開を促す。これにより、高付加価値需要の拡大と地域の製材工場、森林組合との連携を強化し、能登ヒバ林業の再興と地域経済の活性化につなげる構想だ。さらに、地域内外と連携し、能登ヒバを「選ばれる木材ブランド」として確立することを目指す。

いなだに竹Linksは荒廃竹林の整備や竹資源の活用などに取り組むNPO法人で、15年から竹林整備を進め、伐採した竹で国産メンマを製造・販売している。しかし、日本国内のメンマは輸入品が大半のため需要拡大に苦戦し、竹林整備に掛かる手間やコストを地域内で回収することが難しく、持続性が課題となっている。

この課題解決のため、今回の助成を受けて国産メンマや竹菜を用いた商品の開発・製造を進める。国産竹の付加価値を高めるとともに、竹を土壌改良材として活用し、環境負荷の少ない農業の推進にもつなげる考えだ。

同基金は農林中央金庫によって14年に設立され、国内の農林水産業の将来のモデルと成り得る事業に対して助成金を支給している。14～25年度に選ばれた助成先は累計82件、このうち林業分野は累計24件となった。助成事業は来年度も実施される。

森林と地域経済の好循環目指す

キックオフイベント開催

丹波森林LSC

丹波森林LSC（兵庫県丹波市、足立龍男代表理事）は15日、設立を記念して「キックオフイベント」を大阪市内で開いた。同LSCは、国産材の利活用や森林のCSR活動を検討している企業などが対象で、森林と地域経済の好循環を目指す。

開会のあいさつで足立代表理事は「森林の活用が課題であり、守るだけでなく使って循環していくことで健全な環境が保たれるとともに地域経済の核になるように進めたい。もともと丹波地域では、産学官民が一体となって地域の活性化を進めるプロジェクト〝シリ丹バレー（協議会）〟として行っている企業コラボやイベントがこの2～3年に阪神間で増えている。このため、丹波森林LSCを立ち上げて取り組んでいる」と話した。

あいさつする足立代表理事

基調講演では渕上佑樹三重大学准教授が「木材生産と活用がもたらす地域経済波及効果」をテーマに解説。「木材を地産地消することが環境に良いのか、根拠をもって説明しなければ木材関係者以外にはなかなか伝わらない。地域材のローカルサプライチェーンが供給する木材製品の経済波及効果を定量的に評価し、林業・木材産業だけでなく他産業分野にも広がることで、地産他消でも十分な経済波及効果が生じる」とまとめた。

また丹波の炭からはじまる新しい資源環境モデルとして「コーヒー焙煎と森の循環」をテーマに荻原英治荻原珈琲社長が取り組みを紹介した。小長井信宏兵庫県林務課木材利用班長が兵庫県の森林の現状や木材利用促進施策について話した。

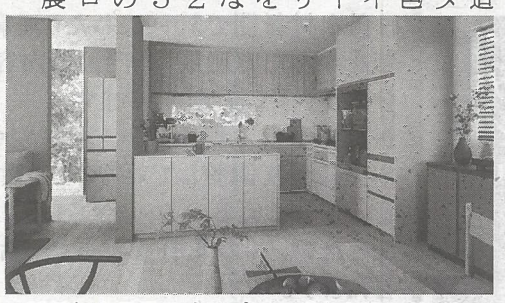
丹波森林LSCは2025年5月に設立。事業内容は山林整備に係る情報発信事業、丹波地域のサプライチェーンの構築、そこで生まれたコンテンツを都市に提供しながら社会的価値の定量化などのサービスを行う。企業向け勉強会や現地視察ツアーも開催している。

システムキッチンの商品力強化

カウンターや扉の新色、収納アイテムなど

トクラス

トクラス（浜松市、小泉和弘社長）は、2026年2月2日に中高級グレードのシステムキッチン「コラージア」の商品力を強化する。自社製人造大理石カウンターや扉への新色追加、収納アイテムのリニューアルなどで、リフォーム提案を強化する。なお、これらは2026年1月5日オープンの「トクラスサロン東京」でも展示する予定だ。



2026年1月5日オープンの「トクラスサロン東京」で展示を予定する「コラージア」

追加仕様によるインテリア性や利便性の向上で、「一生もの」水回りを提供する。カウンターの新色は、人造大理石カウンター「グラーナ」に2色（ヴァームベージュ、ヴァームグレー）を追加。グラーナ特有の光を透過し空間を明るく見せる効果でキッチンを明るく見せる。シート扉は木質感豊かなものなど6色を追加。シニア世代の新築時に人気だったポップカラーを現代風に仕上げた。

収納アイテムは、フルオープンキャビネットのサイズ拡充やダストボックスワゴン付属のごみ箱を拡大。目の高さに降ろせる吊り戸棚は、凹凸の少ない取っ手レス仕様とした。

このほか、水栓一体型浄水器「エルタス」はグースネックデザインを採用し、左右のセンサーで水道水と浄水を本体に手を触れずに吐水できるWセンサー機能を新搭載した。

なお、写真のコラージア（L型キッチンほか）のセット価格は税及び取り付け費用別で544万800円。